

てもらえたときはレファレンスの楽しさを実感します。

どんなに小さな質問でも「この本を参考にすれば分かる」「意外な情報が得られた」といった発見があります。その小さな発見が次にカウンターに訪れた人の役に立つことも多くあります。図書館の財産といえば膨大な蔵書や立派な建物をイメージしますが、利用者みなさんから寄せられた質問や知識も図書館を支える貴重な財産のひとつです。

何か探しものがあれば、ぜひカウンターで相談してみてください。

## How old are you?

収書・整理課 佐々木潤子

本を読む時、気になること…それは何かというと、奥付の著者の略歴にある生まれた年、あるいは、作中に登場する人物の生没年である。なぜ、気になるのかは、よくわからない（他の人は気にならないのだろうか）それぞれの生きた年数の中に人生が凝縮されているように感じるからかもしれないし、自分の年齢と比べるからかもしれない。

本に登場するだけのことはある人達なので、やはり、それだけのドラマ性も、もちろん、持っているわけで…

著者の生年を見て、自分と同年齢だったり、近かったりすると、親しみがわく。「よっ！ご同輩！！」というわけだ。あるいは、「ふんふん、この人は、私より17も年下だ。なのに、この理路整然とした説得性にあふれた文章は！」（いやいや、しかし、そういう賢さや感性は、歳を取れば、誰にでも備わってくるとは限らないわけで…）とか「この人はもう70代なのに、現役で活躍していて、スゴイ！」とか。

亡くなった作家の生没年を知るにつけても、昔は、はるかに年上の人だったのに、自分はその人の年齢を超えてしまい、あ然とするこ

とも。若くても、筋の通ったしっかりした文章が書かれていたり、年配の方でも年齢を感じさせない瑞々しい感覚があふれていたりするのを読んでいる時は、時間を忘れる。

年齢だけで、文章が書かれるのではなく、その人の持っているいろいろな要素が、ある世界を作るのだと思うが、本を読む時は、何かしら書かれた時の著者の実年齢を強く意識する。私の場合は、若くして亡くなった人達に、さらに思い入れが強まる。それは、著者だけでなく、本の中でたまたま出会った、画家の青木繁（1882-1911）であったり、数学者のガロア（1811-1832）であったり、また、幕末の思想家の吉田松陰（1830-1859）であったり、『檸檬』の梶井基次郎（1901-1932）であったり、織田信長に仕えた森蘭丸（1565-1582）であったり、作曲家のモーツァルト（1756-1791）であったりする。（きりがないので、この辺で…）何かの本を読んでいる時、彼らの没年を知るところとなり（あるいは、わざわざ、その生没年を調べたり）、「ひえ～、こんなに若い時に亡くなっているのに（若すぎる！！）あれだけのすごい作品や理論を残している」と、感心する。

今回のこの原稿を書くにあたっては、書庫からおもしろい本を見つけることができた。山田風太郎『人間臨終図巻 上巻』（徳間書店1986年刊）である。（残念ながら、なぜか下巻を所蔵していない）いろいろな分野で活躍した人々の名前と生没年が、短いながらも紹介文とともに亡くなった年齢順に並んでいる。ただし、その人数は限られているし、あくまでも山田風太郎のセレクションではあるが。

著者や登場人物の生没年をきっかけに心惹かれてさらにまた、その人に関連した本を探す。ちょっと変わっているかもしれないが、そんなアプローチの仕方もなかなか、おもしろいのではないかと一人、悦に入ったりしている。（しかし、そんな自分がちょっとコワくもある…？誰か「そんなことないよ」と言ってください→ここは絵文字を使いたいところだが、グッと我慢！）

自分がその人の生き方や考え方に共鳴すれば、つながりのある次の本を求める楽しさを感じながら、時間を過ごすことができる。

そして、今日も新たな発見に出会うべく、目から鱗を落としたいがために、また、自分の好きな著者や人物に再会するために、図書館の海の中へ漕ぎ出してゆく。

自分の好きな本に出会うパターンは人それぞれであろう。私もいつもそういう探し方をしている訳ではないが（普通にOPACで著者名やタイトル、キーワードで検索をしてから、書架に足を運ぶこともありますね）そんな本との出会い方もありかなと思うし、変わった目線で選んだ本を、自分の中のMy Libraryとして持つというのも楽しいのではないかと思ったりする。

